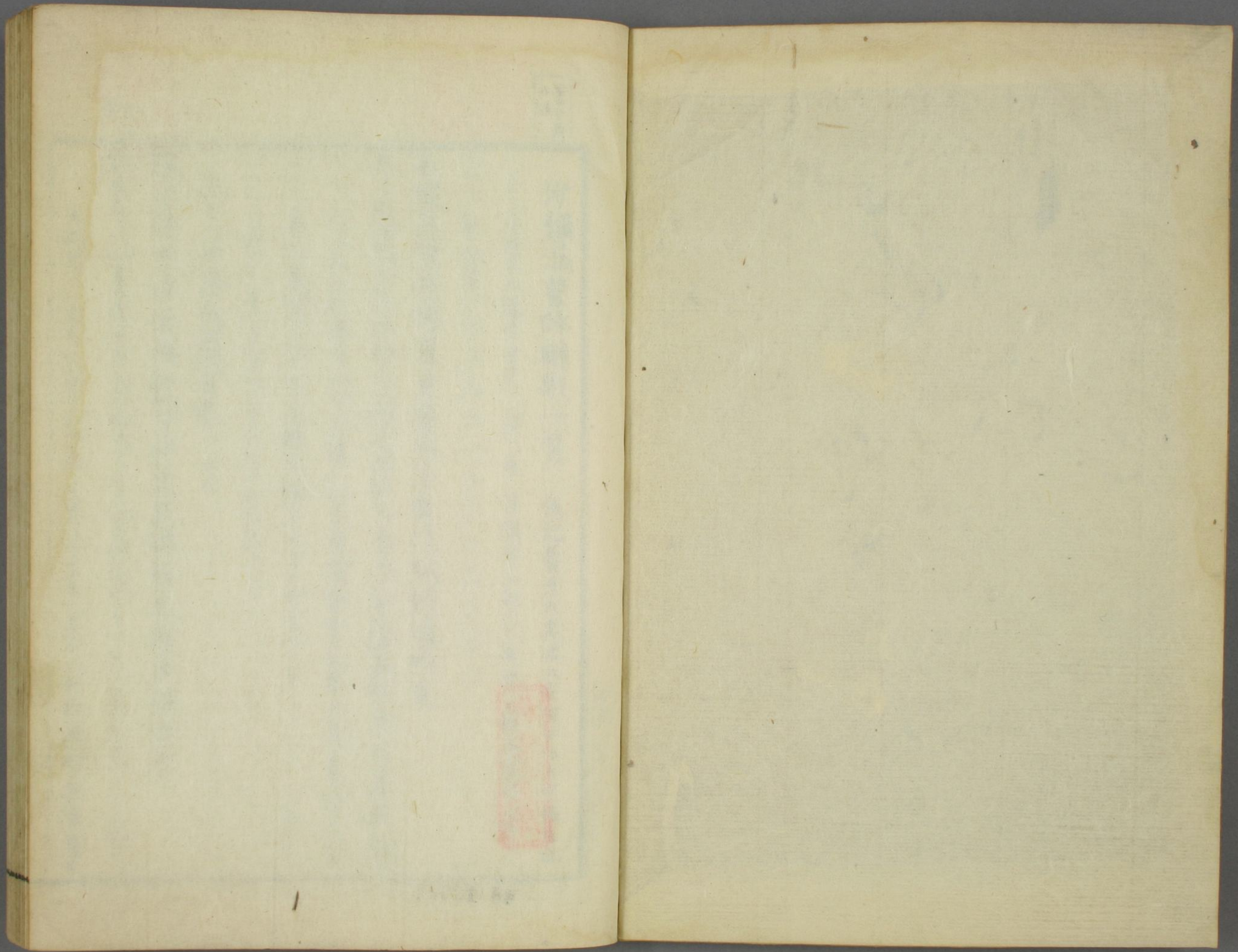


萬葉集略解

三下

柳田文庫
文庫11
A 104
6





文庫II
A 104
6

柳田泉文庫

48 10644

二首前



沙彌滿誓詠縣歌一首

續紀養老五年右大臣後四位上兼朝臣麻呂出家入道の時曾て同七年二月滿誓を初めて筑紫の觀音寺と造り

むく尺ゆ

白縫筑紫乃綿者身著而未者伎禰杼暖所見

まらぬいのつこのわらふみよつけていまうまねとあつこのふみゆ

まらぬいの栴檀つこの條ハ紀ノ神護景雲三年三月より始り毎年太宰綿二十万屯輸京庫と云く昔より云々

山上臣憶良罷宴歌一首

憶良等者今者將罷子將哭其彼母毛吾乎將待曾

たくらういままくらんこたくらんそののたらしこをまつらんぞ
その被らるるはの母の別るまを孝子八和礼麻都良幸ると

あれがこをまつてんぞとよむべ

太宰帥大伴卿讚酒歌十三首

驗無物乎不念者一坏乃濁酒乎可飲有良師

あつちのちもてのとおもひとまひとまのまをけるをのしむか

かひちまのめりしとせんよるはほるをくも牧べし

酒名乎聖跡負師古昔大聖之言乃宜左

さけのなをいふとせしむのちのちしひのこをけり

魏畧云太祖禁酒而人竊飲故難言酒以白酒為賢者清酒為聖

人そむとまひてよめ

古之七賢人等毛欲為物者酒西有良師

いふへのちのちのちいふとまひとまのまをけるをのしむか

七賢ハ嵇康阮籍山濤劉伶阮咸向秀王戎

賢跡物言従者酒飲而醉哭為師益有良之

かろとものいふとまひとまのまをけるをのしむか

うけがよめりしとせんよるはほるをくも牧べし

将言為便將為便不知極貴物者酒西有良之

いふんまをせんまをせんまのまをけるをのしむか

酒のほのちもてのとおもひとまひとまのまをけるをのしむか

酒のほのちもてのとおもひとまひとまのまをけるをのしむか

中中二人跡不有者酒壺二成而師鴨酒二添嘗

ちのちのちもてのとおもひとまひとまのまをけるをのしむか

中中二人跡不有者酒壺二成而師鴨酒二添嘗

あつちのちもてのとおもひとまひとまのまをけるをのしむか

まをけるをのしむか

幸時語同輩曰必矣我陶家之後化而為士幸見取為酒壺實護我
心矣 嘗ハ惜字ナクハシ

熱
二誤

痛醜賢良乎為跡酒不飲人乎熱見者猿二鴨似

あなみちをいづらそまじまけのまぬいともよみれらるふしむ

神武紀大醜字と鞅チキニク態際チキニク徐句チキニク何子チキニク卷十六情出チキニク情追チキニクうさうさ

賢人かちるとやけや

價無寶跡言十方一坏乃濁酒爾豈益目ハ

あふひたさたうらとくさしむまのふけるまけふあにまや

佛経の無價宝珠といふものといふ

夜光玉跡言十方酒飲而情乎遣爾豈若目八目

八方

よるいづるたまといふまけのみやうらをやるまあひまのめや

史記階度祝元陽因之齊ニ以珠光能照夜故曰夜光といふことあり

世間之遊道爾冷者醉哭為爾可有良師

よのちのれあそびのみちんまがくまいしあはるあまのり

遊のるハあまのりまがくまいしあはるあまのり

いふまじもハ冷ハ冷の信もくたけまきし例んといふまじも

今代爾之樂有者來生者蟲爾鳥爾毛吾羽成忒武

このよにハのれあそびんよあむふとらあにれたあそん

虫も毛もよまのんといふ

生者遂毛死物爾有者今生在間者樂乎有名

うまもれんついでしむるものたれこのよにまはハのれあそん

このくものそハ死命あむれハあんとといふ

默然居而賢良為者飲酒而醉泣為爾尚不如來

もだるてけのらあそびのちむるあはるあまのり

あつそくく人とおもひあはれしうらぶらぶとあしむまはるくは志の
ざうらうらうは目一さきかきし七よ母も安良をすあれがき
そりそり人といふ

沙彌滿誓歌一首

世間乎何物爾將譬且開榜去師船之踪無如

よのこのをなまあしむあざびらまじきあはれあはれまじき
おとぼけ解く船むとるをあきびらうらうらうの朗くあはれまじき

七珠海のあはれ何依は良伎之庭とる海うらうらうの思

若湯座王歌一首

若湯座王歌一首 侍られども古の紀取市母定大湯坐若湯坐宜日
足奉とるをよきとる氏かきん

葦邊波鶴之哭鳴而湖風寒吹良武津乎能埒羽毛

あべよたづねなみろみまかせむくくらんつをのまきんも

津守の塙或は伊与と武菟といふ和名抄近江国淺井郡都宇
かりとる考へ湖一本潮をん

釋通觀歌一首

見吉野之高城乃山雨白雲者行憚而棚引所見

みよぬのたのきのやまふまらうくもいゆるをがかりてふれびをみゆ

言城の山を望の中なるべけれどこのまゆわはあんなよの
のしれまよまらういゆはうまらうらう

日置山老歌一首 傳しれむ

繩乃浦雨塩焼火氣夕去者行過不得而山雨棚引

なほのころふ志やうくむひらゆつされいゆをまきあぬくやまらうらう

凡俗事よ太未不利 神事抄 奈波乃川不良衣乃波留奈社波
可及見天見由留奈波乃門不良衣これをあはる遠にはまらう

今の下日の目... 或市の今... 今も秋...
わ... 様... 信... 舟... 舟... 舟...
あ... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
い... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
ま... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

山部宿禰赤人歌六首

繩浦後背向雨所見奥島撈回舟者釣為良下

なほ... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
ま... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
撈... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

武庫浦舟撈轉小舟粟島矣背雨見乍乏小舟

む... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
ま... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
む... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

粟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
名曰阿波... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
よ... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
い... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
ま... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
阿倍乃島字乃住石雨依浪間無比来日本師所念

あ... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
ま... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
此... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
温干去者玉藻莉藏家妹之濱畏乞者何矣示

五八八

美沙居石轉爾生名象藻乃名者告志五余親者知友

美沙居石轉爾生名象藻乃名者告志五余親者知友
美十二四の白吉名者不告
和名抄鴟鳩

秋風乃寒朝開宇佐農能崗將起公爾衣借益矣

あきかぜのふゆあけのさめぬのこころをみよきぬのこころ

秋風乃寒朝開宇佐農能崗將起公爾衣借益矣
和名抄臨津

美沙居石轉爾生名象藻乃名者告志五余親者知友

みさこのゐるいそわおつるのりそのまのらしてよれや小まるとし

美沙居石轉爾生名象藻乃名者告志五余親者知友
和名抄臨津

美十二四の白吉名者不告
和名抄鴟鳩

万解三下 六

文ヲスニ

告てよん五ハ互の信んがハ序まゝくまて妻と本何うしてハ女のまハ
告めずの改よいつるのまハ女ハ改いて逢女ハ名と生れうといふあつるり
ハあつる同りつるも休てこゝよ入るるらん

或本歌曰

美沙居荒磯爾生名象藻乃告名者告世父母者知友

美沙居荒磯爾生名象藻乃告名者告世父母者知友
和名抄臨津

和名抄臨津

丈夫之弓上振起射都流矢乎後將見人者語繼金

あつるをのゆきあつるいつる也をのちみむひんかつてつるがね

丈夫之弓上振起射都流矢乎後將見人者語繼金
神代紀振起弓彌とゆきあつるつるあつるびん弓力のゆきれつるらん
はあつるいつるらん、帝のはあつるつる矢と射つけつるつるえゆかおれ兼

いづれもあやも地へ入るもさうれにまのへん
先もあはれなれにまのへん又かき寄る植柳や田中の
やわやわよかさのあまらううういづれも植柳の大敷下
いとよきよきやいづれもあれどたのとまのこころな
とまのこころ

湯原王芳野作歌一首

吉野雨有夏實之河乃川余持雨鴨曾鳴成山影雨之氏
よぬたふるなつみのかみのあはれかたわくたふるやまのけし
またつ川かきすの大柳のつらうく山の陰とあはれは度敷

湯原王宴席歌二首

秋津羽之袖振妹乎珠匣奥爾念乎見賜吾君

あきつばのそでふる妹をたまうけおくよみりつをみくまへたまひ

晴吟の羽のあき盛りの御とよまかぐね植柳おくよみりつは清く
そとをさかすも席をくまをきかえともあとのみづもほをいし
あまのこころ

青山之嶺乃白雲朝雨食爾恒見持毛目頬四五吾君

あまのやまのあけのしら雲あまのあけのつねよみれども
上のうへへ食の惜うけの白とらううけのけきくおのけ
あまのこころ

山部宿禰赤人詠故太政大臣藤原家之山池歌一首

昔者之舊堤者年深池之澱雨水草生家里

いづれのもまきつみいづれのみいけのちもたけよみくまのいけ
昔者の者舊の堤もむらうみかんと人いづれも

後海老の送るもあまの別荘の山池へ養老四年十月務官の

みづういさばましくるひは
叙 吾来前二
そわごふ

とらふゆ 柚月 さらはまきりてり古 後 明神ハ 朋神の 語也 明つゆとて
天皇とてききこひし古くゆきいりてゆきなりけむと二 昔をまきと 田舎
ゆきひつひおさせ 朋神といふも ちかみまのまひえん さんげりハ 足
まひりてん 果つまて けりてん ちかまのこころ 柚月ハ ありてん 明
とくけりてん ちかまのこころ ちかまのこころ ちかまのこころ
まはまは ちかまのこころ ちかまのこころ ちかまのこころ ちかまのこころ
ゆきとまきりてん ちかまのこころ ちかまのこころ ちかまのこころ ちかまのこころ
とらふゆ

反歌

筑波根矣四十目見乍有金手雪消乃道矣名積来有鴨
つくねをよよよのみにてあまかねてゆきげのみちとたつたか
よよよのよよよのみにてあまかねてゆきげのみちとたつたか
けりてん ちかまのこころ ちかまのこころ ちかまのこころ ちかまのこころ
まはまは ちかまのこころ ちかまのこころ ちかまのこころ ちかまのこころ

山部宿禰赤人歌一首

吾屋戸雨幹藍種生之雖干不懲而亦毛將時登曹念

わがやまのからあまをいぢめれどこりぢてあつてまか人を常
かあある紅花とていぢめれどこりぢてあつてまか人を常
いぢめれどこりぢてあつてまか人を常
あつてまか人を常

仙柘枝歌三首

世よは詠のうまくと暇をいふ又男まことうまくと詠

他づからん身とあつりしれ、和名抄素柘漢語抄云豆美蘇所食い
 粟の棘こそもの

霰零ま志美我高嶺平險草取可奈和妹手字取

あられふちきみづけをささけみとくせとあかたのこいほりてすしとる
 あられふち柘根たはよいづるれくげの奇のこえ次こそく枝
 とあふさるるまなす、そふふは増河まきくばあか載りんと増河のまき
 小やあんきみづのしけをささくまえど、胆前風云記、梓島の取梓
 島のまきをささく胆前まきまきくはまきく風云記、四の句を
 區緩刀理我泥魚とく梓名の嶽よ里人の遊ぶ付くく奇し
 へて室もはばよび奇、古の伝速徳別玉の水奇は波斬まき能
 くとくはしをささくみづきまねてまきくまきくまきくまきく
 くとくまのまきまねてまきくまきくまきくまきくまきくまきく

西解三下 十五

まきくまのまきまねてまきくまきくまきくまきくまきくまきく
 紀一拾装過くく過言くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 ちま紀のまきまねてまきくまきくまきくまきくまきくまきく
 くとくまのまきまねてまきくまきくまきくまきくまきくまきく
 原みくまのまきまねてまきくまきくまきくまきくまきくまきく
 造く者をまきまねてまきくまきくまきくまきくまきくまきく
 くとくまのまきまねてまきくまきくまきくまきくまきくまきく
 妹くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 木くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 柘枝と化く流来て、まきまねてまきくまきくまきくまきくまきく
 くとくまのまきまねてまきくまきくまきくまきくまきくまきく
 詩よゆれ、仁唯兒のまきまねてまきくまきくまきくまきくまきく

枝と作あまをれとかは女の名をよぶとく

右一首或云吉野人味稻與拓枝仙媛歌也但見拓枝傳
無有此歌 及人の記に云く

此暮拓之左枝乃流来者梁者不打而不取香間将有

このゆきつみのえさのなされとはやなうらむとてくらむらむあらん

やなうらむとてとあま或人云此古のそ昔の人よりこも梁と并く拓枝と

とやなうらむとてとあま或人云此古のそ昔の人よりこも梁と并く拓枝と

ほしれ今叶ハ梁はうらむとあれはうらむの流はくもと取れやんうらむ

といふ也

右一首 此下無詞諸本同 此七字及人のち入也

吉爾梁打人乃無有世伐此間毛有益拓之枝羽裳

いふへまやうらむついのなもあせはくもあらまづみのえくをも

りはあまのまは此はよとあまのこは彼は橋が梁并くはふ拓枝のうらむとて
ほしはぬ女の人を 此本一のなれはうらむとてとあまのこは彼は橋が梁并くはふ拓枝のうらむとて
このうらむとてとあまのこは彼は橋が梁并くはふ拓枝のうらむとて
此あまのまは此はよとあまのこは彼は橋が梁并くはふ拓枝のうらむとて

右一首若宮年奠麻呂作

羈旅歌一首 并短歌

海若者靈寸物香 淡路島 中爾立置而 白浪乎

わらうらあやもまののあはかりまたのふらうらあまのこは彼は橋が梁并くはふ拓枝のうらむとて

伊與爾回之座待月 開乃門後者暮去者嗚乎 今滿

いよふめくくもまらづきありのゆはゆられは志をみりしめ

明去者 鹽乎令干 嗚左為能浪乎恐美 淡路島

あけされはとらむとむしむしあいのなみをかこみあのうらま

磯隱居而 何時鴨此夜乃將明跡 待從爾寢乃不勝宿者
いそがらりぬえいつまもこのよのあけんとまつるにいのねがてぬハ
瀧上乃淺野之雉 開去歲 立動良之 率兒等
たごのへのあそぬのまごーあけぬとたちごうむらういごこいし
安倍而榜出年雨波母之頭氣師
あへてこそごていひまはもまつけー

やみみ海神の名もくもやとあへていつりあさのあがりおほし 紀伊と
阿波の同より入瀬は後路の若たをのみらうて 阿波の門より西やうでさ
勢く 阿波と伊予の同よりぬえ西の海の浪もあそむるせ
あよて海軍もく阿波の仲より伊予とさうと止れとぞ今干とい
せしむるむくせしむるも 兼十七も新のさうまよ阿比見之末ト
そ兼二十は依志まーじつとこれそら今見今得とみりぬるめ

洲の例もくくれは空も後のごごいしむらよもきさく神むら
てよのあやもきぬえいしと後へよおれ月梅はあうのこののぬ戸
のぬえいし道へ陸もあおまむらさく海への儀や地を考へ
ゆめとー木のぬめるとんーのゆめあうこのごてんらよ阿比見
つり持ゆくとおれいしと待後侍候の思もくこりよさなるべし
後とからとよあるゆめと空をいしり

反歌

島傳敏馬乃埒乎許藝廻者日本戀久鶴左波雨鳴

志まつるいひぬめのやこいしむらさくあまこいしむらさくはあや
はあゆよとぬるもくもくぬるもくこきとらん末はうのぬとまけハ
倭 志まつるいひぬめのやこいしむら

右若宮年奥麻呂誦之但未審作者

譬喻詩

以集したるなりよハ皆之

紀皇女御歌一首

天武皇女穗積皇子の清く

輕池之納回往轉留鴨尚雨玉藻乃於丹獨宿名久二

かろのいけの...
此ハ大和宮布敷、天武紀十一年作輕池、
二句池と水傳いその

造筑紫觀世音寺別當沙彌滿誓歌一首

造筑紫觀世音寺別當沙彌滿誓歌一首

滿誓のりよといづ

佐ふくち一はのちと傍とむくはあつて哉

鳥總立足柄山雨船木伐樹雨伐歸都安多良船材乎

とまふくち...
いふらり舟材と伐物と...
とまふくち...
いふらり舟材と伐物と...
とまふくち...

歸ハ集中ゆ...
とまふくち...
いふらり舟材と伐物と...
とまふくち...
いふらり舟材と伐物と...
とまふくち...

太宰大監大伴宿禰百代梅歌一首

倭紀天平十五年十一月

始て筑紫鎮西府と名れ外後五位下大伴宿禰百世と副將守

為り一スル

鳥珠之其夜乃梅乎手忘而不折来家里思之物乎

ぬばしるものよけうめをたしめて...
ぬばしるもの梅はたしるものたの愛は、
あふもせむし...
満誓沙彌月歌一首

満誓沙彌月歌一首

あはれなるはれしこと

陸奥之真野乃草原雖遠面影為而所見云物乎

みちのくのまののかやをらふらげどおほむけきてみゆまものを

陸奥行方即真野である。一二の句は遠けりしと料のて

とわかれしつべきとゆけどかゝりし何んとも一二の句は料の

こゝみかゝるはれどあとのをいひ

奥山之磐本菅乎根深目手結之情忘不得裳

おろまのいさをしをけをねらみてむしびららわされぬつも

一二の句はあつてしん存せしむるてかゝるあはれ

藤原朝臣ハ東梅歌二首贈正一位大政大臣房前公の子天草室

字四年名と真梅と政天草神護元年三月大納言正三位と紀よ尼ゆ

妹家爾開有梅之何時毛何時毛將成時爾事者將定

いものよききたるうめのいつもかちちむむとまふしといふいめの

梅と梅とさういふいものいつてもいなるも人の梅のうめのなるとあり

梅といふはさういふいもの

妹家爾開有花之梅花實之成名者左右將為

いものよききたるうめのいつもかちちむむとまふしといふいめの

いものよききたるうめのいつもかちちむむとまふしといふいめの

大伴宿禰駿河麻呂梅歌一首 大伴道足のよみ聖武の弟河

天草十五年橋太良麻呂のよみ連座し流されぬ及に教て光

仁の弟時參藏正四位下陸奥按察使兼鎮守府將軍とらん

梅花開而落去登人者雖云吾標結之枝將有八方

うめのしれさそちちむむといふいものよききたるうめのいつも

ちちむむといふいものよききたるうめのいつもかちちむむとまふしといふいめの

けんかど坂と家の次の娘あは遠くまゝくはへ女をさみく彼娘
と思ふほどやと人のいことびくの心もわらふるさなれがそれあきり
娘のさすはあつて人のよさをい遠へしやとさうたつてさへ
家持の紀郎女は婿さすきく物言をたがひこのよなりさきと花
よあつたをわかとせいのさきく金回すも花もあよりさへ

大伴坂上郎女宴親族之日吟歌一首

山守之有家留不知爾其山雨標結立而結之辱為都

やまかりのあわけるをさしにそのやまのまゆひさてゆひのはらつ
坂と家の女二人と身女を後に海原のこつるまふ母もゆきさへ
とせしを思ふ又と他しさよさうさうさうさうさうさうさうさう
のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
古あまは河

大伴宿禰駿河麻呂即和歌一首

山王者蓋雖有吾妹子之將結標字人將解八方

やまもまはけくあわとわきかこゆいん志あをいんとこのめやも
けがら若とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
我志あはけり枝もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
大伴宿禰家持贈同坂上家之大嬢歌一首 信よさうさう嬢
の下の子のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

朝雨食爾欲見其玉乎如何為鴨後手不離有年

あまにけみみくほはさるそのしさをいさうさうさうさうさうさう
む大嬢もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

娘子報佐伯宿禰赤麻呂贈歌一首

け鳩河のまのま佐伯宿禰

大伴坂上郎女橘歌一首 ちの如と後何ものをいふまけて母のよめを
橘のちの如と後何ものをいふまけて母のよめを

橘乎屋前雨殖生立而居而後雖悔驗將有八方

橘乎屋前雨殖生立而居而後雖悔驗將有八方

橘乎屋前雨殖生立而居而後雖悔驗將有八方

橘乎屋前雨殖生立而居而後雖悔驗將有八方

和歌一首

吾妹見之屋前之橘甚近殖而師故二不成者不止

吾妹見之屋前之橘甚近殖而師故二不成者不止

吾妹見之屋前之橘甚近殖而師故二不成者不止

吾妹見之屋前之橘甚近殖而師故二不成者不止

市原王歌一首

安貴臣のまへ 倭紀天智十五年五月を位より 従五位下と

校より

伊奈太吉爾伎須賣流王者無二此方彼方毛君之隨意

伊奈太吉爾伎須賣流王者無二此方彼方毛君之隨意

伊奈太吉爾伎須賣流王者無二此方彼方毛君之隨意

伊奈太吉爾伎須賣流王者無二此方彼方毛君之隨意

伊奈太吉爾伎須賣流王者無二此方彼方毛君之隨意

伊奈太吉爾伎須賣流王者無二此方彼方毛君之隨意

伊奈太吉爾伎須賣流王者無二此方彼方毛君之隨意

伊奈太吉爾伎須賣流王者無二此方彼方毛君之隨意

大綱公人主宴吟歌一首

倭紀宝龜九年大綱公廣道

大綱公人主宴吟歌一首 倭紀宝龜九年大綱公廣道

大綱公人主宴吟歌一首 倭紀宝龜九年大綱公廣道

大綱公人主宴吟歌一首 倭紀宝龜九年大綱公廣道

ナレハ綱ハ誤りて、綱ハ人ノウケ氏姓氏祓ヲ見スル

須麻乃海人之塩焼衣乃藤服間遠之有者未著穢

まものあまのしちやまぬのふらごころいまだひがあれはまじりまじり

藤布の織目のあつくる遠きこと、位石の程遠うといひたうまじり

おせりまじり、おまじりて人よえなれどよめる古牙たうをとるへてま

比客よまじり、まじりてまじりてまじりてまじりて

大伴宿禰家持歌一首

足日本能石根許其思美管根乎引者難三茅標耳曾結焉

あひきのいねをいひて、みとをいひて、いひて、いひて、いひて、いひて

鳥ハ焉のほたるくれの取つ、こゝろハ疑ふ、管ハ山藁もく妻門冬也

これハ根ハ引とまじりて、まじりて、まじりて、まじりて、まじりて、まじりて

ゆくるるほく、あつと、いひて

鳥ノ標ニ誤

挽歌

上宮聖德皇子出遊竹原并之時見龍田山死人悲傷御

作歌一首 推古紀元年四月既戸豐聰耳皇子とまじりて、皇太子と

す、是の竹原ハ光仁紀兼波宮ニまじりて、車駕龍田道より竹原

行宮ニ還到と有、竹原ハ河内也

家有者妹之手将纏草枕客爾卧有此旅人何怜

いかならばいむうてまのんごまじりて、たしよ、やせる、このいひとあをい

こやせる、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい

いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい

いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい

いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい

いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい

いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい、いひとあをい

も復人語くはるるあり

大津皇子被死之時磐余池般流涕御作歌一首 般目録子

破子他るとよとよ大津皇子天武天皇弟三皇子之皇太子子叛る

好より破中てういをられよしぬ磐余池の履中天皇二年十月他

世しる記より

百傳磐余池雨鳴鴨乎今日耳見哉雲隱去牟

わつふいをれのいけなかくかもとくのみとてやくとがとあちむ

わづよ木河よろづのまどうと隠つよのよひつけほへるてはも

ゆよりまを古へり中隠りよしけ付皇子侍も化せりまつり懐

風薄よ金鳥臨西舎鼓聲催短命泉路無賓主此夕離家向とんゆ

右藤原宮朱鳥元年冬十月 其時山入悲吟

河内王葬豊前国鏡山之時手持女王作歌三首 持統紀

八年四月筑紫太宰率河内玉子降大肆と物贈物と賜ふゆ太宰

府よりまをるはへりる并へまきとそあは葬るよりまへ

王之親魄相哉豊國乃鏡山乎宮登定流

おまきみのじつまあへやとよけのかみのやまをみやとほむむる

此後山にまのつよけむつりくむせまやとよけむつよあへや

ハキ十四ノ霊合者あひぬるものとしてあるありあへやあへやの

たを雲ぐる例へさうたよいあへる府より遠きある英つれはく

よみよよつんをりてはりさふ常ふりあへる

豊國乃鏡山之石戸立隠雨計良思雖待不来座

こよくおのがみのやまのいたもつりかるとおんりまへ

あへりよよと清墓の石門はほれまをりよとあへくいり

石戸破手力毛欲得手弱寸女有者為便乃不知苦

いとわらふしちうしちかじしよらききまぢりあれはまぐべのしちわやく
神代紀乃以御手細用磐戸窺之時手力雄神則兼天照太神之手引
而奉出といふをよめれば女皇ハ河内王の妻より大宰府まで後
いふまじりてあまのこしら

石田王卒之時丹生女王作歌一首并短歌
しんが女皇の字

股くも目福まハ丹生王とそ、二とよふ侍しれぞ

名湯竹乃十縁皇子 狭丹頰相吾大王者 隱久乃
なゆけのをとよめみこさぶつらわらわらみみハこわらくの
始瀬乃山雨神左備雨伊都伎坐等玉梓乃 人曾言
はつせのやまにかんさひふいつきいまそとたよつきのひとをい
鶴於余頭禮可吾間都流枉言加 我間都流母 天地
つるねよつれわのきこつるまのちたえのわのまきつるいあめつち

齋ツ齊
二張

雨悔事乃 世間乃 悔言者 天雲乃 曾久敬能
ふくやまきこものよのわののくやまきこものあまぐものそくへの
極 天地乃至流左右二 杖策毛不衝毛去而夕衢占問
きんあめつものいれるまでふつるきもつのもりゆきつゆよけひ
石ト以而 吾屋戸雨御諸宇立而枕邊雨 齋戸宇
いしとらちちてわのやとふみひろをくくまきこぶいをいへを
居竹玉乎 無間貫垂 木綿手次可比奈雨懸而
むゑだつまをまれくぬきつれゆつらまきかひわよかげて
天有左佐羅能小野之七相管 手取持而 久堅
あめれるさくらのをののちりあまけてあまをちちていひい
乃天川原雨 出立而 潔身而麻之乎 高山乃
のあまのがさくらよいでしちうみろきくまといのやまの

石穂乃上爾伊座都流香物

いとほのうへまませつるし

ちかひけのふりて 花向ふ 花のまはる 花のまはる 花のまはる
ついでに 花のまはる 花のまはる 花のまはる 花のまはる
花のまはる 花のまはる 花のまはる 花のまはる 花のまはる
又の使ひて 花のまはる 花のまはる 花のまはる 花のまはる
みづのまはる 花のまはる 花のまはる 花のまはる 花のまはる
花のまはる 花のまはる 花のまはる 花のまはる 花のまはる
ときくわい 花のまはる 花のまはる 花のまはる 花のまはる
むしむ 花のまはる 花のまはる 花のまはる 花のまはる

およづれの流まきまきとハ横まきまきとハ枉の流まきまきと
よびべーといひつるものしんかんを御多くとハ考互遠隔乃極と考
そへのみまきまきとハ式祈年祭祝詞よ、天能壁立極国能退立限と
しんかんといひ遠くゆれるまきまきとハタつる道のまきまきと
同いふまきまきとハ出、石うららるるを踏てとつるし、兼行紀柏峡大跡。
やぶらむまきまきとハ石の石を柏葉なりて舉んとまきまきとハ
時、柏のやぶ大虚まよまきまきとハれそらるるを踏石といひつるし、此
句の千五七二句まきまきとハみわらむとハ神の流まきまきとハ齋まきまきとハ
いとむへ竹まきまきとハ出、まきまきとハ例まきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハ
まきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハ
まきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハ
まきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハ
まきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハ
まきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハまきまきとハ

とつしものゝ宮もつらこはたつよまけと河べし集りみちのくのこのま
づいちうふよことあるすまふく七節の多しといつらうつ後よまを
るのハ大後河上天津菅原より草六管根取くこつづまふとつて
まをよまふ神事ありたつとみのことけをまをさうらひさひしゆ
その川原よりハ物る解く天地の根よりつてみまをさやま
其つていふ山のまハ暮あをいふ

反歌

逆言之 狂言等可聞 高山之石穗乃上爾君之卧有

およづれの^{たがひ}まらつとつかまのいそわのうへよまふづこやせま
このまをよま余頭礼狂言といひたか狂言も並べりハハのまよ
ふれん逆言とささのこつとつしこらう天智紀妖偽の字をねよ
つれとよまんとまをいふまよまへつとつしつれ狂の根なりんとつ

万解三下 九

とつしものゝ宮もつらこはたつよまけと河べし集りみちのくのこのま

石上振乃山有杉村乃思過倍吉君爾有名國

いそのうみぶらのやまの杉のむら乃思過倍吉君爾有名國

あるハ山邊歌、ハハ思ひまをさうらひさひしゆ

同石田王卒之時山前王哀傷作歌一首

子のぬきまふ、草原五の文へ僕紀老七十年十二月後四位下より卒

とつしものゝ宮もつらこはたつよまけと河べし集りみちのくのこのま

角障經石村之道宇 朝不離 将歸 人乃念乍

つぬきりまふいそのうみぶらのやまの杉のむら乃思過倍吉君爾有名國

通計萬四波 霍公鳥 鳴五月者 菖蒲 花橘

かまひけまはほろまをさうらひさひしゆ

宇 玉爾貫 獲爾 將為登九月能 四具禮能時者

をれと... かつふやんと... 万世雨... 不絶等念而... 将通君乎婆明日徒... 可聞見年... かしみむ

此五の... 天智紀童... 又聖武紀天智十九年九月太上天皇

天皇の... 天智紀童... 又聖武紀天智十九年九月太上天皇

右一首或云柿本朝臣人麻呂作

或本反歌二首

隱口乃泊瀬越女我手二纏在王者亂而有不言八方

河風寒長谷子歎乍公之阿流久雨似人母逢耶

かゝるやのさびさはつせをなげさつまみのあはるるよほひとあへや

そは勢仲ふつるや、紀を如法王をふ嫁しつらひてこまのつね

ひらその夫ををとつらひふまなふ人、いづる人かあへや、

女ふつる人ふまあへつらふ

右二首者或云紀皇女薨後山前王代石田王作之也

山前の王のまをいせ

柿本朝臣人麻呂見香具山屍悲慟作歌一首

草枕羈宿雨誰孀可國忘有家待莫国

く床るらるるのやとらたつあつふとまをれつるいんまをふ

あつらふこれとまをふつらふまふんあつらふかつらふ室をさるの

はは莫の真の混つていんまをまをあつらふそれき、十一よらふ

めはとらふつらふ入家莫国への莫と古本直とあれは、おの流論

たつらふらきふれつらふれつらふ射良をふらつらふハ、縁を

あつらふ射良をあつらふらつらふらつらふらつらふらつらふ

麻多奈久尔、つらふつらふらつらふらつらふらつらふ

をけつらふらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふ

田口廣麻呂死之時刑部垂麻呂作歌一首 廣麻呂、傳記

これら、廣麻呂、あつらふ

百不足八十隅坂雨手向為者過去人雨蓋相牟鴨

もたつらふやまふらつらふらつらふらつらふらつらふ

るつらふ、杖詞、隅坂、隈路の法、つらふらつらふらつらふ

不足八十廻手、隅坂、隈路の法、つらふらつらふらつらふ

かつらふらつらふ、集年、つらふらつらふらつらふらつらふ

なり伊形那伎命の美奈もあはれ幸しく女布子逢ませしと
かゝるよもこの人みちるをいつと徳をまわして道の八十とま毎
日向しつてゆは遠くふるもあしんうわく

土形娘子火葬泊瀬山時柿本朝臣人麻呂作歌一首
隱口能泊瀬山之山際雨伊佐夜歷雲者妹鴨有年

こわくのはつせのやまのやまのまふいよともいわたのしあらし
火葬の煙とやといひるせりばあきとまはるくのもつもの山よあま
されびくもいへていへて

溺死出雲娘子火葬吉野時柿本朝臣人麻呂作歌二首
山際後出雲兒等者霧有哉吉野山嶺霏霞
やまのまゆいづものころうはさかちかれやうぬのやまのえねふれい

霏ヲ霏
ニ保

八雲刺出雲子等黒髪者吉野川奥名豆颯
やくささいづものころうはさかちかれやうぬのやまのえねふれい

ゆきのあまそとくさく大英のききへふとせこそあはせりやく
ささかた川とく岸とを遠くちとけい

過勝鹿真間娘子墓時山部宿禰赤人作歌一首并短歌

日本朱書云東語云可豆思賀能麻未能氏胡（ハノノチノ）
うそそいはいの容のせよとれもあまの胃のきいよむて
しづらとるものには流く死よしとんぬけあうらとあふまらん
真間八十徳園著飾歌古今十首

古昔 有家武人之倭文幡乃帶 解替而 廬屋立
いふへあをげんひとのまづものおびとまうへてあせやう
妻問為家武勝杜鹿乃真間之手兒名之奥擲乎此間登波

文ヲ父
ニ保

杜ヲ社
ニ保

ままひーけんがつめのまのてぶれがむくつきむくつきは
 聞行 真木葉哉 茂有良武 松之根也 遠久寸
 きけどちかこのちやまげうしんまづねやぶかくひさし
 言耳毛 名耳母吾者 不所忘
 ここのみちのひせられはちんちんえれくみ

傳文はらむ出ま千一は古のまづさうきと信ひられこれがくま
 のまづさうき屋をまらるはよせやうとくまぐち樹をさうき
 古河のまづさうきやうとくまぐち樹をさうきとくまぐち樹を
 まらるはよせやうとくまぐち樹をさうきとくまぐち樹を
 まらるはよせやうとくまぐち樹をさうきとくまぐち樹を
 まらるはよせやうとくまぐち樹をさうきとくまぐち樹を
 まらるはよせやうとくまぐち樹をさうきとくまぐち樹を
 まらるはよせやうとくまぐち樹をさうきとくまぐち樹を

牡
鹿
北

ままひーけんがつめのまのてぶれがむくつきむくつきは
 ままひーけんがつめのまのてぶれがむくつきむくつきは
 ままひーけんがつめのまのてぶれがむくつきむくつきは
 ままひーけんがつめのまのてぶれがむくつきむくつきは
 ままひーけんがつめのまのてぶれがむくつきむくつきは
 ままひーけんがつめのまのてぶれがむくつきむくつきは
 ままひーけんがつめのまのてぶれがむくつきむくつきは
 ままひーけんがつめのまのてぶれがむくつきむくつきは

反歌

吾毛見都人 爾毛将告 勝牡鹿之 間間能手 兎名之 奥津城
 處

ままひーけんがつめのまのてぶれがむくつきむくつきは

壯ラ
誤

勝牡鹿乃真々乃入江雨打靡玉藻荊兼手兒名志所念
かしのまめのいささかちかたまたまかちかんでござりおやゆ
生間のほろろと流るるさかといふさかといふ

和銅四年辛亥河邊宮人見姫島松原美人屍哀慟作歌
四首 けだつはまき二二全同くやうりこのあひ女の屍をみく傷め

麻ハ座
誤カ

加麻幡夜能美保乃浦廻之白管仕見十方不怜無人念者
かまのみのほのうらわのまをみればさかたきいとあはば
上の指通は所紀伊國之徳石重の前此奇再古のまのくしの奇
ともふゆとささきのれはさかた保の美保まかたかた地を
まへに塔河といふ好まぬは橋津りまかたゆれは美保といふ

惜ラ情
誤

或云見者悲霜無人思丹

見津見津四久米能若子我伊觸家武儀之草根乃干卷惜
裳入野中朝建之るも林下無人思丹

みつくとこのわごごいよれをいそのかやねののれまを
みつくと樹の上よをいよれをいそのかやねののれまを

人言之繁比日玉有者手雨卷以而不戀有益雄

いとこのよけこのこなたまなういてまをいよれをいそのかやねののれまを
るまをいよれをいそのかやねののれまを

妹毛吾毛清之河乃河岸之妹我可悔心者不持

いかわれとよみのかみのかをぎのいもがくゆへいそのかやねののれまを
ちこそあやのまをいよれをいそのかやねののれまを

清みの月ハ光ニ浄之宮よりそよそよと流るの清見原の川ちるべしきくそ
ほみの月をいひわたりはたしほよ心清く二心をきこまなく山岸のくさ草
より悔ふつてけりそ、昔十四夜念のきくしの時の思くするの木の梅
へさかひをきくそとまをいひたり

右案年紀并所處乃娘子屍作歌人名已見上也但歌辭
相違是非難別因以累載於茲次焉

神龜五年戊辰太宰帥大伴卿思戀故人歌三首 故人の

愛人纏而師敷細之吾手枕乎纏人將有哉

うらへしきひとのまをてしきつて之のわらまをまきひにあはれめや
此偈の事あち宰府よりきりけりふきそアアゆらゆら人よえあふ
いふと、昔十字流波之等しあはれいふくそしりつと阿波へきまふと、柳は

右一首別去而經數旬作歌

應還時者成來京師雨而誰手本乎可吾將枕

かへるよととふはたやうくみやとそてたのうかたここのころつまくる人

天平二年は浪多へゆれしを室を去來ハ去の浪まくたりのこといふ、昔五

和我摩久良可武とるまくる人としつとをゆらさる

在京師荒有家雨一宿者益旅而可辛苦

みやとたふるあれしういよひとらねいよまさるそくくかへる

仲るくくくくくくくくくく

右二首臨近向京之時作歌

神龜六年己巳在大臣長屋王賜死之後倉橋部女王作

歌一首 神龜六年八月己天卒と改らる倉橋部女王ハ傳りしや

天皇之命恐大荒城乃時雨波不有跡雲隱座

かきま
あらしのみのみこかきまおらあしきのときよあしねどくもかきまよ
あらしの荒籟の異きく、残をい下は龍麻より自經死をいし四
しつてといふぬくくし、残のけい地ごとくもよき、おのつゝなよひ
を傳へしをよめをきくせり、天をたよはれり

悲傷膳部王歌一首 長屋王の子也、後紀神龜元年二月無位膳

夫より後四位下を授けり

世間者空物跡、将有登曾、此照月者、滿闕為家流

よのたののつちをさしものもあらしむとぞ、あてする事いふぢうけく
あんとてそのこと思ふこと

右一首作者未詳

天平元年己巳攝津國斑田史生（ヒツサハ、タツ）文部龍麻呂自經死之時
判官大伴宿禰三中作歌一首并短歌 後紀天平元年十一

月京畿内の斑田司を任す、みゆ斑田のり、田今よあし、三中、天平
十二年正六位上より外後五位下を叙す、子外より紀より多るる、此
時、斑田使の判官なり、和名抄安房國長狭郡史部（波世豆）
加倍 あれハ、代氏と、そくよあし

天雲之 向伏國 武士登 所云人者 皇祖

あまぐもあむらむらむらあものゆいをいひと、かみあきの
神之御門爾外重雨立候 内重雨 仕奉

かみのみらむらむらあへふ、ささむらむらむらあへふ、つらへまつりて、
玉葛 彌遠長 祖名文 繼往 物與母父爾

たままのつらむらむらあへふ、ささむらむらむらあへふ、つらへまつりて、
妻爾子等爾 語而 立西日後 帶乳根乃 母
つまのつらむらむらあへふ、ささむらむらむらあへふ、つらへまつりて、

命者齋三ノ字前坐置而

一手者木綿取持

みこといづるをまへおきりひとくみゆりて

天

地乃神祇 乞禱何在 歲月日香 茵花 香

君 之牛留鳥 名津迎來與立居而 待監人者

王 命恐 押光 難波國爾 荒玉之

年經左右二白携 ね 不干 朝夕

在鶴 公者 何方爾 念座可 鬱蟬乃 惜

此世乎露霜 置而 往監 時爾不在之天

このよをづゆのねまきりいけむどすのちか

大やのまの祈年を祝詞は四方国者天能壁立松く白雪能層居向

伏限しりす甲くて他のまをいひくみく天地のかぶるまひ

内守と閤門をいひく兵衛府もれり此座を二衛門府の門初

物於よるる各御府もれりまきりまきり枕詞いや遠きまきり

馬りもりまきりまきり田使まきり他國へ如まきりまきり

先祖の名を建てる人とは母妻を後く教をまうとて母のみこと
 親とやよひて子何さき居て終るは向ふも此人の志さ
 らん子を毎の有り終るもあはれくは終るもさき平とてな
 り信はるよとすき何と終るもあはれくは終るもさき平と
 して花は枕何あはれくは終るもあはれくは終るもさき平
 をさき香とさき何と終るもあはれくは終るもさき平と
 いり之牛二字或は牽一字とやあはれくは終るもさき平
 何と枕何とあはれくは終るもあはれくは終るもさき平
 ちとていんと遠き道とあはれくは終るもあはれくは終るも
 さき平とあはれくは終るもあはれくは終るもさき平と
 田多くすあはれくは終るもあはれくは終るもさき平と
 何と甲とさき平とあはれくは終るもあはれくは終るもさ
 き平と

昨日社公者在然不思雨濱松之上於雲棚引
 きのあはれくは終るもあはれくは終るもさき平と
 火美のくあはれくは終るもあはれくは終るもさき平と
 何時然臨待年妹雨玉梓乃事太雨不告往公鴨
 いつとあはれくは終るもあはれくは終るもさき平と
 事とさき平とあはれくは終るもあはれくは終るもさき平と

反歌

昨日社公者在然不思雨濱松之上於雲棚引

きのあはれくは終るもあはれくは終るもさき平と

火美のくあはれくは終るもあはれくは終るもさき平と

何時然臨待年妹雨玉梓乃事太雨不告往公鴨

いつとあはれくは終るもあはれくは終るもさき平と

事とさき平とあはれくは終るもあはれくは終るもさき平と

天平二年庚午冬十二月太宰帥大伴卿向京上道之時

作歌五首

吾妹子之見師鞆浦之天木香樹者常世有臨見之人曾奈

吉

わきまごみしものうらみのむろのきいごよふあれがみいひをたきし

福の浦ハ備後之和名抄檀一名河柳品無とあり孝于五天平八年新羅

へ使人のまどの中ふたるれきの宮の樹をよめるニそまゝそれと雖彼

とむり備中の神宮のまよ次であれはごとく同鞠の浦の極のまよ

らん天本香とちうハ檀考へしとさうよとちうハ書と思ひくよまよ

鞠浦之磯之室木将見每相見之妹者将所忘八方

このうらみのむろのきいむむらあひみいハわきまごみし

おんしそまをさよんしそまをなれまよむろのまよが

もくしそまをさよんしそまをなれまよ

磯上丹根蔓室木見之人乎何在登問者語将告可

そくくいのちうむろのまよとて名をいはれいさこくハ松毛の影いさあ
とまもいへむろのまよの影いさこくハ松毛の影いさあハ伊のかの江
このれり

右三首過鞠浦日作歌

與妹来之敏馬能埒乎還左爾獨而見者淨具末之毛

いりしやみぬめのまよまかへんしひさしとてこれまよむむら

みぬめのまよまかへんしひさしとてこれまよむむら

去左爾波二五見之此埒乎獨過者情悲哀

いさこくいさこくわがみいのまよまよむむらとてこれまよむむら

哀一本喪もゆるゆさのまよまよむむら

一云見毛左可受伎濃 末の向へんおとせむまよむむら

かろくしそまをさよんしそまをなれまよ

右二首過敏馬埒日作歌

還入故郷家即作歌三首

人毛奈吉空家者草枕旅爾益而辛苦有家里

いとほきむねしきいへんまあまらふてくまかまら

もあまらふてくまかまら

興妹為而二作之吾山齋者木高驚成家留鴨

いへんまあまらふてくまかまら

依保の家なるべし、卷サ属目山齋作奇三そ皆池を高くとよみしり、

さればくも山齋をそのちし川へれと古くはよびまを裁て、日が

やどそしあれは、朝をさしあけやどし川を、を賑をまらせんく山

東くちをせんく山

吾妹子之殖之梅樹每見情咽都追淨之流

わすれころしつりめのみさしよふころむせつたみごとく

同山齋の梅とよめ

天平三年辛未秋七月大納言大伴卿薨之時歌六首

聖武紀此年月大納言從二位大伴宿禰孫人薨難波朝右大臣大紫長

徳之孫大納言贈從二位安麻呂第一子也とて歌の上作のちと後

愛八師榮之君乃伊座勢波昨日毛今日毛吾乎召麻之字

はきやせのうきまのいませびきのけしむをのまら

如是耳有家類物乎芽子花咲而有哉臨問之君波母

かこのみふあつけるかのまはげのまをまてありや

ひきまよかのまをまてありや

かこのみふあつけるかのまはげのまをまてありや

一二の句へらむしそんまら

君爾戀痛毛為便太美蘆鶴之哭耳所泣朝夕四天

きみよこひいづこもへたあまのこのねのみたのゆあまよひあて

いふこころしん集申す存るあはれのみやうきを思ふくは芦鶴若鹿をい

皆そ何所の物とてうてをせしあまよひといひてを長くうてこん

遠長將仕物常念有之君師不座者心神毛太思

こひたのくつへのむむものとおひるきましまをねばうらどわ

うらどわと心しあまよひ

若子乃匍匐多毛登保里朝夕哭耳曾吾泣君無二四天

みよこのあまいづかむあまよひのあまがわらうくうみたうて

あまうこのあまうと思ふくまをせし齊明紀うつくま阿我倭柯松古弘

あればわらうまのうてうらうらうらわうハ他細くよあま

資ラ仕
ニ課

右五首資人金明軍不勝大馬之慕心中感緒作歌

万解三下 四十一

今仕人しむ西本資人子能ふよる慕の下述の字かへト資人の軍防令大納

言百人し青ま光三年の紀のあ

見禮行不飽伊座之君我黄葉乃移伊去者悲喪有香

みれだあまのいまきまのむらぶのうつりぬれがなりくあまこの

福にいぬれがはま中まきかたらうとうとよよ回くこころをいへぬれ

いのいも後後

右一首勅内禮正縣大養宿禰人上使檢護卿病而醫藥

無驗逝水不留因斯悲慟即作此歌 賦多令義解内礼正一

人掌宮内礼義

七年乙亥大伴坂上郎女悲嘆屋理願死去作歌一首并

短歌 たはまをんくはに新羅うらまをうと和相七年五月安麻さつ

の時よりけあまのあ居くかま後と侍くもあ七年子死うらうて

天
保
大

栞角乃新羅 國後 人事字 吉路所聞而問放流
たぐつめのさきものくにゆいごとをよこさかしてしむる
親族 兄弟無國雨 渡來座而 天皇之 敷座
うからけらからかきこみわらわらきりてしめろきめの志きり
國雨内日指 京思美彌爾 里家者左波爾雖在何方
くはうちひさきやとさきよさきいへせはよあれい
爾念鷄目鴨都禮毛忒吉佐保乃山邊爾哭兒成 慕
にせひけめもつれもきよふのやまへかきこみりて
來座而布細乃 宅字毛造 荒玉乃 年緒長久
きりてさきへのいへをもつるあらまのとのとさき
住下 座之物字 生者 死云事爾 不免
さきひついでいささきのをいささしとさきぬれぬ

物爾之有者憑有之 人乃盡 草枕 而 容有間雨
ものありあれたのありしものこもさきりたしむるほふ
佐保河字朝川 渡 春日野字 背向爾見尔 足氷木乃
さかがはをあさきはわりかきぬをさきひついでいさきの
山邊乎指而晚闇臨隱益去禮將言為便將為須敬不知爾
やまへをさきゆつえかきぬれいんさきせんさき
徘徊 直獨而 白細之 衣袖 不干 嘆尔
たがひついでいさきりてさきりてさきりてさきりて
吾泣淚 有間山 雲居 輕引 雨爾零寸ハ
わのりくたまふありまやふくわらわらひさあめあつたわ
たぐつめの栞角 人事字 吉路所聞 人言 吉路所聞 遠く
徳を感して 聖朝 傳化 吉路 所聞 吉路 所聞 吉路 所聞

作氣新良愛、光仁紀誰、我語、作氣年執、我同、依氣年止
フ、二由、依、年、執、年、依、氣、年、止、
ふ、い、つ、大、家、石、川、命、婦、者、の、温、泉、へ、ゆ、く、事、な、り、た、ま、は、り、依、保、
川、と、り、も、ま、ま、の、事、と、り、ゆ、や、み、く、ハ、タ、ヤ、の、ゆ、く、と、り、ま、ま、
宮、も、い、く、や、み、く、と、り、人、と、い、つ、ハ、カ、レ、ウ、ハ、い、運、ま、ま、く、た、初、め、
し、ハ、た、は、い、い、つ、ゆ、く、坂、上、郎、女、一、人、を、ま、あ、つ、と、り、ま、有、る、心、は、極、は、け、り、
ま、あ、つ、と、り、ま、ま、ま、の、温、泉、へ、ゆ、く、事、な、り、た、ま、は、り、依、保、
ま、あ、つ、と、り、ま、ま、の、事、と、り、ゆ、や、み、く、ハ、タ、ヤ、の、ゆ、く、と、り、ま、ま、

留不得壽爾之在者敷細乃家從者出而雲隱去才

反歌

万解三下 四十三

右新羅國臣曰理願也遠感王德歸化聖朝於時寄住大
納言大將軍大伴卿家既逢數紀焉惟以天平七年辛亥
忽沈運病既趣泉界於是大家石川命婦依餌藥事往有
馬温泉而不會此哀但郎女獨留奠送屍柩既訖仍作此
歌贈入温泉
十一年巳卯夏六月大伴宿禰家持悲傷亡妻作歌一首
從今者秋風寒將吹烏如何獨長夜乎將宿
弟大伴宿禰書持即和歌一首

弟大伴宿禰書持即和歌一首

六月の...

長夜乎獨哉將宿跡君之云者過去人之所念久爾

なよきよをひとやねんときみいつへんをぎよひとのおしやゆらくに
まゐの人も指りおつておまんとりておまかゆくおのほりいひおつて
歎く詞へ拾穂かまの下之のいひ

又家持見砌上瞿麥花作歌一首

秋去者見乍思跡妹之殖之屋前之石竹開家流香聞

あきゆらみつたぬべといはうらやどのたぐてこまきふけるか

あつまあへんぬのさこ

移朝而後悲嘆秋風家持作歌一首 七月百こ

虚蟬之代者無常照知物乎秋風寒思努妣都流可聞

うつせみのよいつねたのたまものをあきやせむしむまぬびるか

秋風の肌をきまらたふりも古のまをきまら

借ヲ惜
ニ誤露
霜ッ霜
露ニ誤

又家持作歌一首并短歌

吾屋前雨花曾咲有其字見杼情毛不行爰八師

わのやどいばかのそききつるをみれどころもゆめをきや

妹之有世婆水鴨成二人雙居手折而毛令見麻思物

いもがあやせはみうらむふうあわらむいぬまきうてしむせうもの

乎打蟬乃借有身在者露霜乃消去之如久是日木乃

をうつせみのかれるみたれづゆいものけぬるごとくあひびきのの

山道乎指而入日成 隱去可婆 曾許念爾曾已所痛

やまぢをささういひいひわらかろまみあはそくもまむねをいふめ

言毛不得名付毛不知跡無世間爾有者將為須辨毛念思

いひのねがらふもまらふあはらむよのたのむれせんまらう

水鴨かきつ蟬のやうしつへ惜日本借ともまよる秋男ハ借れる地の心

まるとし、本丹みづらみん可カ能レ流ル身ヲ、ハハハハ、霜霰一本露霜と
ふとふ、そふまはれとやふふ

反歌

時者霜何時毛将有乎情哀伊去吾妹可若子乎置而

ときふしいついあはんとこころいづいけりまのわんざふと
つとまふまはれとやふふ

出行道知末世波豫妹乎将留塞毛置未思乎

いづいけりまのわんざふとこころいづいけりまのわんざ
つとまふまはれとやふふ

妹之見師屋前雨花咲時者經去吾泣淚未干爾

妹之見師屋前雨花咲時者經去吾泣淚未干爾

悲緒未息更作歌五首

如是耳有家留物乎妹毛吾毛如千歳憑有来

かのみまあけらものといひさねちよのこもたのみさけら
つとまふまはれとやふふ

離家伊麻須吾妹乎停不得山隱都禮情神毛念思

いざいのういもまわきしはなはあはまかこつれこころいづい
つとまふまはれとやふふ

世間之常如此耳跡可都知跡痛情者不忍都毛

よのちのういねがこのみかたしれいこころいづい
つとまふまはれとやふふ

佐保山爾多奈引霞每見妹乎思出不泣日者無
さほやまたたぢびくかきみこころのいさをせいでたのぬいなり

大英の嫁より哀をいあくれむこ

昔許曾外雨毛見之加吾妹子之奥柳常念者波之吉佐寶
山

むうこそよろいみしゆきことあはくきとめはげきさほやま

けりきさほやま

十六年甲申春二月安積皇子薨之時内舍人大伴宿禰

家持作歌六首 後紀天平十六年正月安積親王縁脚病後櫻

井頭宮還丁丑薨時年十七歳 職負内舍人九十人掌帶刀宿衛

供奉雜使若駕行分衛前後

掛卷母綾雨恐之 言卷毛 齋忌志伎可物吾王

鳥ノ羽

かけまくとあやまかいらいんまくとゆきのもゆのれがきこみ

御子乃命萬代爾 食賜麻思 大日本 久邇乃京者

みこみよこよろつあめたまはまおがやあくとけのみやこ

打麻春去奴禮婆 山邊雨波花咲乎為里河湍雨波

うちちびくはるまわぬればやまふおがたまきんてあかせふハ

年魚小狹走彌日異 榮時雨 逆言之 柱言登

あゆこまほりあいやひんかまのゆるとまよれよつれのまのこ

加聞白細雨舍人装束而和豆香山 御輿立之而久堅乃

かもしろくよごねあしよるひてわづのやまみこちてひがの

天所知奴禮展轉泥土打雖泣 將為浪便毛奈思

あやこぬれいさるひむつちなげせんまへもた

いさるひむつちなげせんまへもた

丈夫大
三誤

如めい此耳い奈良之丈夫之心よ振起と 劔刀 腰雨取

かのみあちらあらをのこらふちおこつるぎならしとこち

佩 梓す子し鞞取負而 天地興 彌遠長雨 萬

はきあらむゆみゆきとらおひてあめつもといやとからふとらつ

代雨如此毛欲得照憑有之皇子乃御門乃五月蠅成驟騷

よふかくもがわしたのめもみみのさはくたらしとわぐ
舍人者白栲雨服取著而 常有之 咲比 振麻比
こねあらむとらふこらもとこらまさてつねならしとままいしるまい
彌月異更經 見者 悲呂可毛
いやいげかららふみれかがりきらのも

呂ヲ召
二誤

八十は男ハ多クの詔教とりし、わもいはいこなりし日、大ふよのこ

活道山ハ六六ノ天平十六年正月十一

日登活道岡集一株松下飲歌一 市原ヲ多持てちのふもとこらい

同年二月一花もつらひるよみれば久遠高きをきたらし後

紀一藤原朝臣伊久治とし女の名もみこらつらひとらひハ葉ト

同一く助家也言記あや母志波呂加母と外例也

反歌
波之吉可聞皇子之命乃安里我欲比見之活道乃路波荒

雨鷄里
はきみもみこのみこのあらがいみいこのみちあらはけらし
らきもみこのあらがいみいこのみちあらはけらし
ゆらのあらがいみいこのみちあらはけらし

大伴之名負鞞帶而萬代爾憑之心何所可將寄

おぼしきのなほおしきおびてよろつふたのみりころいづのよせん

神代紀一書云大伴連遠祖天忍日命云負天磐鞞云云立天孫之前云云又
景行紀云日本武尊甲斐國酒折宮云居云云鞞鞞云云大伴連之遠祖
武日之宿云云云云姓氏祿大伴宿祿の降云天孫天降云云云の時
云云云云然後以大来日却為鞞及却天鞞負之乎起此也云云云云大伴
の名より鞞ハスレ也

右三首三月二十四日作歌

悲傷死妻高橋朝臣作歌一首并短歌

白細之袖指可倍氏靡寢 吾黑髮乃 真白髮爾

しろくすのそでさかへてなひきれわがくろみのましろがら

成極 新世雨 共将有臨 玉緒乃不絶射妹臨

なほしきをみあしよのりあんとたまのものをたえいむわと

結而石 事者不果 思有之 心者不遂 白妙之

むらびてしよのりあんとたまのりあんとけりきりたへの

手本矣別丹持火爾之家從裳出而緑兒乃哭字毛置而

たかをわのれあきびしよのりあんとたまのりあんとけりきりたへの

朝霧 髣髴為下 山代乃相樂山乃 山際

あきあきあきのよちうつやまのりのきりあきのよちあきのま

往過奴禮婆將云為便將為便不知吾妹子臨左宿之妻屋

ゆきまきぬれしよんをせんをせんをせんをせんをせんをせん

爾朝庭出立悵 夕爾波 入居嘆舍 腋掖

ふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

兒乃泣母 雄自毛能 負見抱見 朝鳥之啼耳哭

舎合
撰ヲ撰ニ
無毎撰

因香の下爾一本跋と云ふよしありて、昔十六歳のころのころを成すありしころ
余ヨスガ須可のゆきみつ志ぬん

朝鳥之啼耳鳴六吾妹子爾今亦更逢因矣無

あさとり鳥のなきのゐなりんわびもこふいまもさらけあふよりをさるる

おとりのめくくつとを思ひたり、空をこゝ鳴六の之鳴の語さくおのゝつらつら

あつらんといふきあはれげしいう

右三首七月廿日高橋朝臣作歌也名字未審但云奉膳

之男子焉 續紀神護景雲二年高橋安曇二氏の内膳司に任る者

とて奉膳と云ふこと又式目にもあり又原名字より下は後人の假名を

加へたる也一

萬葉集卷第三

卷三追加

竹玉 カハハ神代紀にける五百箇野ノ篤ノ八十五籤ノ玉ノと供は母をて小竹

小竹を、神を齋する玉用ひたるもんとや、ほのまなく、玉の代り玉竹と

とてのめく切も、供を養ふるなるべし竹玉と八十玉ののりしとて、ハ

玉竹は竹けりとも竹玉とてあてハつひく、さて玉竹玉ハ〇〇〇〇

かゝのめくつらぬきくもなるべしと定むにア

○枉言 相ハちて粒の保すて、たはこゝ刑へしと定むにア、昔十七世の

多婆タハ許等とあるも、まのまのといふかたちも、又、光仁紀の詔も、

多波許止とあれば、されば、相ハ粒の保とて、たはこゝとあるも、

がまのりんき、字鏡ニ記ハ太波ト止トなり

○天皇皇祖 皇祖神の訓ハ、久光考ふ、まのまの、まのり、ハ皇祖のゆき

かり、ハ皇祖多く皇祖とあり、又、天皇とあるも、皇祖のてこよヤセる

